
井谷恵子先生（保健体育学科）

教員養成大学における セクシュアリティに関する 意識についての実践研究

第1章 プロジェクトの概要など

1. 教員養成大学におけるセクシュアリティに 関する意識についての実践研究

（セクシュアリティ研究）

日本国内にセクシュアルマイノリティと呼ばれる人たちは、日本人における左利きの人口と同じくらいいると言われており、学校のクラスの1～2人はLGBTの子どもがいる。その一方でLGBTについて出身養成機関で学んだことのある教員は1割にも満たないことが分かっている。

このように、セクシュアルマイノリティと呼ばれる人に出会っている可能性が高いにも関わらず、出会っている自覚がない人が多い上に、教育現場をはじめ、社会のセクシュアルマイノリティに関する認識は高いとは言えない現状がある。特に教員は、セクシュアルマイノリティについて認識がないと、知らず知らずのうちに目の前の子どもを傷つけてしまう危険性がある。

そこで、教員志望の学生が多い本学で、セクシュアルマイノリティについて考えるきっかけを作る取組を行うことにした。

2. 代表者および構成員

・代表者

辻奈由巳 学校教育専攻 M1

・構成員

高桑詩乃 教職実践専攻 M1

三上純 教科教育専攻 M1

3. 助言教員

第2章 内容や実施経過など

1. 講演会

(1) 日時、場所

平成29年6月25日（日）

13:00～15:00

A2講義室

(2) 企画概要

- ・外部講師による、最新のLGBT事情についての講義
- ・学校教育を考えるグループワーク

(3) 講師について

土肥いつき先生

本学大学院修了。京都府立高等学校教員。セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク副代表。

京都を中心に様々な性現象（異性装、トランスジェンダー、同性愛、バイセクシュアル、半陰陽など）の理解を深める活動をしている「玖伊屋（くいや）」の活動に参加。中学生や高校生のトランスジェンダーの集まりの必要性を感じ、2006年にトランスジェンダー生徒交流会の活動を開始した。

(4) 広報活動

宣伝チラシを作成。授業時間内に宣伝した。また、メンバーが知り合いに声をかけ、参加者を募った。



2. レインボーフェスタ見学

(1) 日時、場所

平成29年10月7日（土）

11:00～16:00（開場10:00）

扇町公園

(2) レインボーフェスタについて

多様な性のありかたを知り、ありのままを肯定し、つながっていく。様々な変化や影響の中で、そんな場をつくり続ける。そんな思いが込められた今年のレインボーフェスタは、12回目を迎える。

性別、セクシュアリティ、国籍、年齢等、参加に必要な資格はなく、誰でも参加できる。

LGBT の理解が広まることを願い、「パレード」「ステージ」「ブース」の3つの催しが行われる。

3. 上映会

(1) 日時、場所

平成29年10月25日(水)

13:30~16:00

シアタールーム

(2) 上映作品について

「リリーのすべて」

世界で初めての性転換手術(現在の性別適合手術)を受けた主人公とその妻の愛を描いた作品。



© 2015 Universal Studios. All Rights Reserved.

(3) 広報活動

授業でチラシを配布したり、メンバーの知り合いに声を掛けたり、学内一斉メールを送ったりして宣伝した。

当日は立て看板を作成し、会場までの道を提示した。



4. レインボーカフェ

(1) 日時、場所

平成29年11月12日(日)(藤陵祭3日目)

終日

C棟ロビー



(2) 企画概要

- ・セクシュアルマイノリティのパネル、活動紹介の展示、机上への資料展示
- ・セクシュアルマイノリティの啓発に使われている教材にある、LGBTの方にインタビューしたDVDの放映
- ・コーヒーとお茶の販売

フリースペースとして場所を提供しながら啓発活動をした。当日は学内を歩き回り、レインボーカフェについての宣伝を行った。

5. ポスター展示

(1) 期間、場所

平成30年1月9日~1月23日

教務課ロビー

(2) 展示内容

藤陵祭でポスター展示したものに加え、セクシュアルマイノリティ概要、教員アンケートをもとにつくられたパンフレットを展示した。

第3章 結果や成果など

1. 講演会

(1) 参加者

合計20名(e-projectメンバー含む)

(内訳)

学部生2名

大学院生4名

専攻科学生4名

その他10名

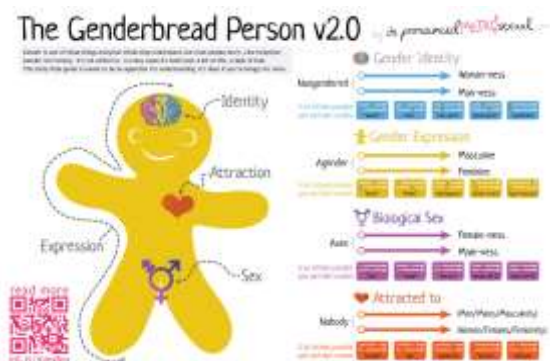
その他の参加者は他大学の学生や現職教員、

LGBT 啓発活動をされている方等であった。

(2) 講演内容概要

セクシュアリティについて

セクシュアリティを考えることは、人間について考えることと同じこと。男女2つに分けたのは、人間理解の一步にすぎない。そのセクシュアリティの多様化は、人間を理解するための手助けにもなる。セクシュアリティの指標はいくつかあり、1つの要素には無限のバリエーションがある。



アライ (ALLY) とは

自分は当事者の前に「アライ」である。自分は教員であり、1番大切なのは目の前にいる子どもたちである。

アライは、よき理解者という解釈があるが、本当は「ともに歩む人」「ともに闘う当事者」だと思っている。そして、マジョリティとは、自分と他者の違いに気づかない状態にさせられている人たちと言い換えられる。

セクシュアリティは誰もが当事者であり、自分と他者の違いに気づけることができる。そのためセクシュアリティを考えていると、他の問題を考えるときにも、自分独自の視点が見えてくる。

(3) 成果

「難しいことを簡単に伝えようとする」と抜け落ちる部分があるので、難しいことを難しいまま伝えます」と始まった講義は、その宣言通り、簡単な内容ではなかったが、講義内容をもとにグループワークは盛んに行われていた。

メンバーが知り合いに声をかけ、その方が

知人にも紹介してくださったことが、参加者の増大につながった。また現職教員の参加もあったことで、学校現場の話を学生と交流することができた。

2. レインボーフェスタ

(1) 全体参加者

フェスタには4700名の来場、パレードには760名の参加があった。



(2) メンバーの感想

セクシュアルマイノリティ当事者やアライの団体の多さに驚いた。出展者、発表者、参加者みんなが笑顔で明るい雰囲気だった。行くまでは正直どんなことをしているのか分からなかったが、ブースやステージ発表、パレードがあつて楽しかった。セクシュアルマイノリティについての理解が広まることで多様な生き方が認め合える世の中になればいいなと一層思った。(辻)

当事者だけでなく、アライの方も多数参加しており、初めて参加した私にも親しみやすい雰囲気だった。色んな出店もあり、楽しみながらセクシュアリティに関する見方・考え方を深めることができた。参加したことでより一層LGBTへの理解が広がってほしいと思った。(高桑)

大阪で行われたレインボーフェスタに初めて参加した。自分なりに今までセクシュアリティについて勉強し、研究活動を行ってきた中での参加であり、非常に楽しみにしていた。実際に行ってみると、非常に明るく楽しい雰囲気では会場は盛り上がっていた。いろいろな人と話してみる中で、本当にいろいろな人がいて、性も含めて人は多様な存在であると強く感じた。だからこそ、なぜ学校や職場とい

ったところに立ち返った時に、「セクシュアルマイノリティ」と呼ばれる人たちがいじめや疎外の対象にされなければいけないのかと感じた。特に教員養成大学に在籍する自分たちは常に考えなければいけないと考える。今後、この e-project の活動だけではなく、様々な形でセクシュアルマイノリティを支援する活動が行われていくと良いと思う。実際に会場で多くの人と触れ合っ、「セクシュアルマイノリティ」としてではなく、多様な性のあり方の一つとして全てのセクシュアリティが理解されていくといいなと感じた。(三上)

3. 上映会

(1) 参加者

合計 22 名 (e-project メンバー含む)

(内訳)

学部生 4 名

大学院生 9 名

専攻科学生 5 名

その他 4 名

その他の参加者は現職教員、大学教員、大学職員等であった。

(2) 成果

当事者である主人公とそれを支える妻が抱く葛藤や苦悩が如実に表現されており、トランスジェンダーや同性愛についてだけでなく、「パートナー」や「愛」について考えるきっかけにもなった。

参加者のアンケートから、授業内でチラシを配布したり、学内メールで 2 回宣伝したりしたことが効果的だと分かった。また、講演会と同様に知人への声掛けや、声をかけた知人からの紹介も有効だった。



4. 藤陵祭展示

(1) 参加者

コーヒー、お茶は合計 50 杯売れた。偶然立ち寄った方や、展示を見に来られた方もたくさんおられた。

(2) 成果

本学学生だけでなく、学外から来られた方も興味を示してくださり、展示を見ておられた。C 棟入ってすぐの場所で行ったため、通りすがりの方でも目に入りやすく、立ち寄ってくださることにつながったと考えられる。

特に、LGBT の当事者にインタビューした DVD は、普段聞くことのできない当事者の声を聴くことができたため、見入っておられる方が少なからずいたことが印象的だった。



5. ポスター展示

(1) 参加者

名前や感想を残してくださった方は 8 名であったが、メンバーが学生課に行ったときには展示を見ている方もいた。

(2) 成果

学生課ロビーに展示したため、通りすがりの方にも見てもらいやすかったのではないだろうか。同性愛や性別違和の概要、当事者とアライの声、教員の意識についての内容のため、教員として自分に何ができるかを考えられるきっかけになったと考えられる。感想をより多く残してもらえる工夫として、感想用紙と回収ボックスを準備する必要性も感じられた。



第4章 まとめと反省、今後の展望など

1. まとめと反省

(1) 「知る」から「伝える」へ

講演会、レインボーフェスタ見学でセクシュアルマイノリティについてや当事者の方、アライの方の思いを知ることができた。「知る」と「伝える」の間として上映会を実施し、活動そのものとセクシュアルマイノリティの周知を目指した。そして、それらを経験して伝えたいことを藤陵祭とポスター展示でまとめ、啓発することができた。

(2) 協力のおかげで成し遂げられた取組

初年度で、どうすればセクシュアルマイノリティについて広められるかを考えながらの活動だったため、盛りだくさんのプロジェクトだったため、盛りだくさんのプロジェクトだった。行き当たりばったりで準備をしてしまい、スケジュールが厳しい状況がいくつかあった。スケジュール管理の不十分さはメンバーへの負担が大きくなってしまっている原因にもなっている。しかしながら、限られた時間の中で各自が協力し、自分にできることを考えながら行えたこと、メンバーが声をかけて手伝ってくださった方のおかげで、1年間活動し続けることができたことは大きな成果だと考えられる。

2. 今後の展望

(1) 学部生への周知

プロジェクト全体を通して、参加者の多くは大学院生や現職教員の方だった。学部生の参加が少なかったため、教員志望学生にセクシュアルマイノリティについて知ってもらうという目的を十分に果たせていない。学部生にも周知できるようにするために、プロジェクトに学部生を勧誘して一緒に取り組みをしていくことが重要だと思う。

(2) アライの輪を広げるために

企画で扱った内容は一般的なセクシュアルマイノリティについての知識だったり、大人になってから自分がセクシュアルマイノリティだと自覚した方の話であったりしたため、参加者が自

分の身近な問題として考えるには少し難しかったように思う。LGBTアライの輪を学内に広げるためには、同世代のセクシュアルマイノリティ当事者やアライの方の話を聞く機会をつくっていくことが必要だと考える。

<参考・引用文献>

レインボーフェスタ！2017

<http://rainbowfesta.org/index.html>

映画「リリーのすべて」2015、イギリス

LGBTスピーカースキルアップハンドブック（特定非営利活動法人虹色ダイバーシティ）

高校生向け人権講座 セクシュアルマイノリティ入門（新設Cチーム企画）

子どもの‘人生を変える’先生の言葉があります（研究代表者：日高庸晴）

<http://www.health-issue.jp/kyouintyousa201511.pdf>

いのちリスペクト。ホワイトトリボンキャンペーン

<https://ameblo.jp/respectwhiteribbon/>

付録：上映会アンケート結果

1. 上映した映画『リリーのすべて』を知っていますか

したか

はい・・・4 いいえ・・・13

2. 今回の企画をどのようにして知りましたか（複数可）

チラシ・・・4 メール・・・7 大学の講義・・・

1 知人・・・6 その他・・・1

3. 映画の内容に興味を持ちましたか

持った・・・16

少し持った・・・1

あまり持たなかった・・・0

持たなかった・・・0

4. どのような内容に興味を持ちましたか

- ・LGBTである本人が、自分がそうであると認知していく過程に興味を持ちました。
- ・昔は精神病だと思われていたこと
同性愛は認められていたのにLGBTはまだ知られていなかったこと
- ・LGBTの方の実際に近い生活の様子や気持ちの変化、そして側にいる人の気持ちに対して興味を持ちました。
- ・LGBTの人自身がどのような気持ちなのか
どのようにして社会で生きていくのか
今まで自分の身近でそういったことを経験したことがないので知りたくなった。
- ・精神異常と診断を受けたこと
奥さんの受け止め方
- ・男と女とは、一体何であるか
心と身体
- ・トランスジェンダー運動について
（この映画以降どのような取り組みをされていたのか。また日本では正確にいつからLGBTについて認知されるようになったのか。）
- ・同性愛や性転換など、デンマークでさえもまだ新しいということ。デンマークでは、自分で性別を決め

ることができるし、同性愛結婚もできて、性にたいしてリリーのような人が辛い思いをする人が少なくなっている社会のことを考えると、この映画で、救われる人は日本に多いと思います。

- ・男の人が社会的な理解もない世の中で、どのような気持ちで女性になったのか知りたかったです。
- ・LGBTについての理解が社会的に得られていない点
リリーが本当の自分とは何なのかに苦悩する様子
パートナーや友人の心情
- ・性同一性障害が理解されていない時代の主人公や家族の思い、周囲の反応など
- ・LGBTについてのドラマや本は見たことがあったが映画は初めてだった。
妻が最後までリリーを支え、絵を描き続けたことがすてきだなと感じた。
- ・大人になってから爆発するように、精神と体の性が違っていることに違和感を持つ人もいるのかと思った。
性転換の手術がそんなにも昔からはじめられたのかと驚いた。
- ・このような映画が少ないから。

5. 映画を見た感想

- ・大学で見るには「きわどい」部分がありましたが、全体としてよい映画という感想です。安い啓発映画にはない奥行がありました。「リリー」も大変だけど、周囲の苦悩と支えている気持ちを知ることができました。
- ・今だからこそ認知されてきたLGBTですが、アイナー、リリーのように苦しんでいる人たちは多くいるだろうし、そういう人たちに気づかなければならないと思いました。
- ・私自身、人間はいろいろな人がいて当たり前だと思っていたが誰もがそう思うわけではないし、私も当たり前と思いながら、LGBTのことをよく知ろうとしていなかったことに気づかされました。いろいろと考えさせられ、もっと知らなくてはならないと思われました。
- ・人の愛について、人が人を愛することは、友人、夫婦であれ、本当の愛は同じであるということ。

見る人、見る視点によってさまざまな見方ができる良い映画であると思う。LGBTについてそれぞれの視点の人の理解が深めることのできる作品だった。

- ・これまで知識としてLGBTの方について学ぶことはあったけど、夫婦のことや、当事者の方の苦しみがこの映画ではわかりやすく、リアルにわかりました。体が男性、心が女性で普段周囲の女性を見る視点や様子も初めて知りました。周りの関わりのこともよくわかりました。
- ・私の身近にも、同じような人がおり、この映画を見て、私自身知りたかと思ってたこと。そのようなセクシュアリティのことで悩む人の立場や気持ちを直接きくことは少し難しいので、このような形で少し知ることができて、観に来て良かったです。
- ・私が思っていたよりも苦しいものなのだと知った。まだ認知の低い時代は、今より生きにくかっただろうと思う。相談すること、言い出す勇気は私たちには分からない大きなものだと感じた。この映画を見て本当に良かった。
- ・自分の性に違和感を持って生きている人の気持ちも分かり、そのまわりの人たちのとまどいや受け止め方をよく知ることができた。自分のまわりにはあまりないことなので、この映画を見て少しでも知ることができてよかったと思う。
- ・見ていて胸がしめつけられました。男性だが女性であるという葛藤と妻ゲルダの感情が直接心に伝わってくるようでした。セクシュアリティについて興味を持ちました。さらに詳しく学んでいきたいです。
- ・人は誰もが自分は「男」または「女」と認知しているかと思います。そしてその考えが世間一般当たり前として思われています。しかし「男」でも「女」でもない、心と身体が一致していないこともあるのだということをもっと知らなければならぬと思いました。最近やっとセクシュアリティについて認知されるようになってきましたが、もっと一般的にこのことについて広まってほしいと願います。
- ・性別を変えるというより、心の性と体の性を一致させるという事実をこの映画で強く考えさせられました。LGBTなど、性について辛い思いをしている

人は多くいるし、そんな人々がマイノリティとしてではなく、一人の人間として自信をもって生きられるようになればよいなと思いました。

- ・彼女の存在は知っていましたが、映画でより詳しく知ることができました。人の愛は、性別によって区別されてはいけないということがよく分かる映画だったと思います。周りに昔同性愛者の人がいたので、彼らは生きづらかったのだらうと思います。
- ・リリーのよう人間がいることは自然だと思うがやはり私の感覚にあてはめると不自然に感じてしまう。このギャップや違和感にどう向き合うべきかは今後の課題になると感じた。
- ・性同一性障害の苦しみ、辛さ、もどかしさ、映画を通してその人の人生の一端にふれとても身近に感じることができた。夫婦の関係を越えた人間愛が素晴らしかった。子孫を残す意味で男女は必要なものだが、人の人生を考えたとき、その人がやりたいこと、与えられた役割を納得いくように生きていくには、性は大きな問題ではなく、人間力、人間性をつきつめていくことが大事だと思った。
- ・自分の心と身体が一致していなくてその原因がわからずに苦しんでいることはとてもつらいだろうと思った。危機を冒してでも手術をして女性になるリリーの勇敢さがすごいと思いました。リリー役の人は男性の時と女性の時体型が全然違っていたが、どうされているのかと疑問に思った。
- ・リリーは残念ながら亡くなってしまったけれど、完全に手術が成功するのは、リリーの手術から何年後なのだろうかと疑問に思った。本人もそうだけれども周りの人の苦悩も多少なりともあるのだと分かった。
- ・「男か女」へのすばらしい映画化に感動しました。主役のリリー役やゲルダ役の人がすばらしい！性転換手術の歴史的な映画でもありました。性や男性・女性・人間についてのテーマでもあります。